

# 山根Ⅲ遺跡Ⅳ

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

二〇二〇年

2020

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

やまねさんいせきよん  
**山根Ⅲ遺跡Ⅳ**

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

2020

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



## 序 文

長野原町は、群馬県の北西部に位置し、「八ッ場ダムの建設」に伴う生活再建事業の進行とともに、新しいまちづくりを進めています。

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

今回報告する山根Ⅲ遺跡の発掘調査は横壁地区農業経営近代化施設整備事業に伴い、記録保存を目的として実施されたものです。

本調査地点では平安時代を中心とした土坑群（陥し穴群）を検出することができました。成果の詳細は本編に譲りますが、本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書発刊にあたり、多大なるご指導・ご協力をいただきました関係機関および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和2年3月

長野原町教育委員会  
教育長 市村 隆宏



## 例　言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁に所在する山根Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は横壁地区農業経営近代化施設整備事業に伴う事前調査として、長野原町の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、水源地域対策特別措置法第12条による負担金並びに道路橋梁費補助金が充てられた。
4. 調査は発掘調査を令和元年6月21日から同年7月11日迄、整理調査及び報告書作成を同年7月16日から令和2年3月28日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田　遺構・遺物写真撮影：富田　遺物実測・トレス：柿本・坂井

図版および写真図版作成：富田

7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

### 例) 山根Ⅲ遺跡 IV (遺跡名) (第4次)

8. 調査において以下の項目の一部を委託した。  
表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社  
測量・空中写真撮影：(株)測研
9. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音順・敬称略)  
相京建史・麻生敏隆・飯森康広・石田　真・小野和之・小川卓也・川田　強・黒澤照弘・桜岡正信・  
佐々木由香・榎原正洋・鈴木徳雄・閑　俊明・高橋政充・中沢　悟・藤巻幸男・洞口正史・松田　哲・  
向出博之・山口逸弘・吉田智哉  
群馬県教育委員会・(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・(株)測研・(株)歴史の杜

10. 調査組織は次の通りである。

調査主体　長野原町教育委員会

調査組織	教　育　長	市村　隆宏
	教　育　課　長	佐藤　忍
	文化財保護課室長	富田　孝彦（文化財係長兼務）
	文　化　財　係	高田　靖之（子ども子育て支援室兼務）
調　査　参　加　者		細川　剛史（地域おこし協力隊　～令和元年6月30日）
		柿本六美・坂井春栄・藤野麻子・向出治恵

## 凡 例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町 1994)、1:25000「長野原」(国土地理院 2009)である。
2. 採図・図版の方位は真北を示す。
3. 採図・図版の縮尺については下記のとおりであり、各採図中に示してある。  
遺構：土坑・陥し穴…1/30  
遺物：土器・石器…1/2
4. 遺構の略号については以下のとおりである。  
S K：土坑（陥し穴）
5. 採図に示した遺物の詳細は、観察表に記してある。観察表における陶磁器の法量は左側が器高、中央が口径、右側が底径、その他は左側が長さ、中央が幅、右側が厚さを表すことを基本とする。
6. 本書における遺構・遺物の計測値について、( )は現存値、< >は推定値を示す。
7. 本文並びに土層注記で使用したチフラの略号は以下のとおりである。  
As-A：浅間 A 軽石 As-B：浅間 B 軽石 As-C：浅間 C 軽石 As-D：浅間 D 軽石  
As-YPk：浅間草津黄褐色軽石 As-YP：浅間板鼻黄褐色軽石
8. 土層や土器の色調に関しては「新版標準土色帖 2001年版」(編・著 小山正忠・竹原秀雄、監修 農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修 財團法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。土器の色調は観察表において、外面／内面の順で記し、同一の色調の場合は一つで表現した。
9. 採図中のスクリーントーン・記号は以下のとおりである。

遺構・土層図



## 目 次

序文

例言・凡例

目次

### 第1章 調査概要

　　第1節 調査に至る経緯.....1

　　第2節 調査の方法.....1

### 第2章 遺跡の立地と環境

　　第1節 遺跡の位置.....3

　　第2節 周辺の遺跡.....3

　　第3節 既往の調査.....13

　　第4節 基本土層.....14

### 第3章 検出された遺構と遺物

　　第1節 遺跡の概要.....21

　　第2節 繩文時代・平安時代の遺構と遺物.....21

《写真図版》

《報告書抄録》

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の河岸段丘分布図 (1/35,000) .....	6	第7図 SK02・03 実測図 (1/30) .....	23
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/35,000) .....	7	第8図 SK04 実測図 (1/30) .....	24
第3図 調査地点位置図 (1/2,500) .....	13	第9図 SK05 実測図 (1/30) .....	25
第4図 基本土層図 (1/20) .....	15	第10図 SK06 実測図 (1/30) .....	26
第5図 山根田遺跡IV調査区全体図 (1/180) .....	20	第11図 SK07 実測図 (1/30) .....	27
第6図 SK01 実測図 (1/30) .....	22	第12図 土坑出土遺物実測図 (1/2) .....	28

## 挿 表 目 次

第1表 周辺の遺跡 .....	9	第3表 山根田遺跡IV出土遺物観察表 .....	28
第2表 山根田遺跡調査一覧 .....	14		

## 図 版 目 次

P L 1	1. 調査区遠景① (北から) 2. 調査区遠景② (北真上から)	P L 4	1. SK04 (北から) 2. SK04 半裁 (北から) 3. SK05 (北から) 4. SK05 半裁 (北から) 5. SK06 (北から) 6. SK06 半裁 (北東から) 7. SK07 (北西から) 8. SK07 半裁 (北西から)
P L 2	1. 調査区近景 (北東から) 2. 基本土層 (調査区南壁)	P L 5	土坑出土遺物
P L 3	1. SK01 ① (東から) 2. SK01 ② (北から) 3. SK01 半裁 (南東から) 4. SK01 掘り方① (東から) 5. SK01 掘り方② (北から) 6. SK02 (西から) 7. SK03 (北から) 8. SK03 半裁 (北から)		

# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

横壁地区農業經營近代化施設整備事業は、同地区で実施した土地改良事業を補完するものである。

平成30年12月上旬に長野原町役場産業課より横壁地区農業經營近代化施設整備事業の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課に照会があった。対象地は周知の包蔵地「山根田遺跡（№29）」の範囲内であり、同時に町営横壁土地改良事業に伴い対象地に隣接して本調査を実施した際に縄文時代早期の土坑や平安時代の陥し穴が検出されていることから、確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施の合意を得た。文化財保護法第94条第1項の規定により、平成31年4月9日付けで「発掘届」が提出された。調査予定地はカラマツを主とする森林を形成しており、調査に入る前に伐採・抜根が必要であった。調査体制は教育委員会直営で、令和元年6月21日より実施する運びとなった。

## 第2節 調査の方法

### （1）発掘調査

#### 1. 表土除去

表土除去の前段階として、調査区には伐採後の切り株が数多く存在したため、出来る限り掘削しないように抜根を行なった上で表土除去に移った。両作業とも重機（バックホー）、根や排土運搬はクローラーを使用した。排土置き場は、調査区北側の斜面下を充てた。周辺の本調査で確認された土層を参考に掘削を行なった。バケットの爪に鉄板を装着し、遺構を傷つけないように配慮した。平安時代と縄文時代の遺構が想定されたため、上層で遺構が検出されない場合は縄文時代の遺構確認面まで掘り下げることとし、さらにローム漸移層上面まで掘削した。

#### 2. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行なった。抜根による攪乱と土坑（陥し穴）を岐別して確認面上面を人力で削り、平面形を確定していく。

#### 3. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した後で、適宜土層観察ベルトを設定して行なった。

遺物の取り上げについては、遺構に伴うと判断したもの及び遺存状態の良いものは出土状況図またはドット図を作成し、標高を計測して取り上げた。その他の遺物は、出土層位に留意して遺構毎に取り上げた。

#### 4. 遺構実測図の作成および遺構の写真撮影

遺構実測図は、光波測距儀を用いて全体図、土層堆積状況図、遺物出土位置図、完掘状況遺構平面図を作成し、必要に応じてエレベーション図の作成も行った。全体図を1/100、土坑（陥し穴）の平断面図を1/20で図化した。

遺構の記録写真は、35mm小型一眼レフカメラとデジタルカメラを併用して撮影した。モノクローム・カラーリバーサルの2種類のフィルムを使用し、両者同一カットを3枚1単位で露出を変えて撮影した。

## (2) 調査の経過

横壁地区農業近代化施設整備事業は同地区土地改良事業に併行して協議されてきたが、事業地が決まらないまま、土地改良事業に伴う発掘調査が平成 29・30 年度に実施された。結局、事業地が決定してから本調査を実施したのが令和元年度であった。事業地が土地改良事業における調査箇所の隣接地であったため、確認調査は実施せず、伐採・抜根をへて表土掘削することとなった。

### 1. 発掘調査

発掘調査は、令和元年 6 月 21 日から同年 7 月 11 日にわたって実施された。

6 月 21 日、抜根立会。

6 月 24 日、抜根立会。

6 月 25 日、抜根立会。

6 月 26 日、表土掘削開始。全体の 2 分の 1 終了。

6 月 27 日、表土掘削終了。

7 月 2 日、調査区壁切り、ジョレン掛け開始。

7 月 3 日、ジョレン掛け、遺構精査。土坑 7 基確認。全景ドローン撮影。土坑断ち割り開始。

7 月 4 日、雨天のため、整理作業。

7 月 5 日、土坑半截、セクション写真。

7 月 8 日、土坑半截、セクション写真、セクション図作成開始。SK03・06 完掘、写真。

7 月 9 日、荒天のため中止。

7 月 10 日、SK04・05・07 完掘、写真。

7 月 11 日、SK01 完掘、写真。平断面図作成。撤収。道具手入れ。

### 2. 整理調査・報告書作成

整理調査・報告書作成は、令和元年 7 月 16 日から令和 2 年 3 月 28 日にわたって実施された。発掘調査によつて得られた遺物はテンパコで 0.5 箱、現場で作成した図面は 14 枚であった。整理調査は担当の他に作業員 4 名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業・接合作業は令和元年 7 月 16 日から同年 7 月 26 日まで実施した。

遺物の実測・トレースは令和元年 8 月 5 日から同年 8 月 9 日まで実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は令和元年 11 月 1 日～同年 11 月 29 日までに事業の合間に実施した。

令和元年 12 月から報告書編集作業を開始し、遺構図版・写真図版のデジタル編集を令和 2 年 1 月下旬まで、併せて執筆作業を令和 2 年 1 月下旬～2 月上旬にかけてを行い、2 月下旬～3 月下旬に編集の最終調整・校正、印刷製本を実施し、併せて保管用に資料・遺物の整理をしてすべての作業を完結した。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置

山根Ⅲ遺跡が所在する長野原町は群馬県北西部にある吾妻郡の南西隅に位置し、東は吾妻郡東吾妻町（旧吾妻町）・高崎市倉渕町（旧倉渕村）、北は吾妻郡草津町・同郡中之条町（旧六合村）、西は吾妻郡嬬恋村と接し、南は浅間高原を経て長野県北佐久郡軽井沢町と県境をなす。本町は高間・白根の両山系と大洞山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・渓谷に向かう山岳傾斜地帯である。

町の北西には草津白根山（標高2,170m）、南西には浅間山（標高2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高1,341.7m）や王城山（標高1,123.2m）、吾妻川より南に丸岩（標高1,124m）や首峰（標高1,473.5m）など、南部は南東から南にかけて浅間隠山（標高1,756.7m）、鷹巣山（標高1,431.4m）、鼻曲山（標高1,655m）など、周囲を1,000m～1,800m級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近（標高1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。町域は吾妻川の中流にあたりが、かつて酸性を帯びた水質をもつ支流の流入により、中流より下流にかけて魚類の生息に適さない状態であった。しかし石灰投による中和処理が開始されて以来、水質の改善が行われている。

吾妻川两岸は大字長野原付近でやや幅が広く、河岸段丘が発達する（第1図）。この段丘面は最上位・上位・中位・下位の4段階で形成されている。これら段丘面とその上位の丘陵上に織文時代～平安時代にかけての遺跡が多く見つかっており、現在でも住宅地や田畠として利用されている。これらの段丘は約21,000年前に浅間山から噴出した応桑泥流堆積物が侵食されて形成されており、その上を覆っている関東ローム層中には約11,000年前に噴出した浅間・草津黄色軽石層（As-Ypk）が堆積しているのが認められる。現在の吾妻川からの比高差は最上位段丘面で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘で30m前後、下位段丘で約10～15mを測る。大字川原湯から東では川幅が狭まり峡谷をなし、吾妻渓谷を形成している。

長野原町が含まれる浅間山周辺地域は、気候的には太平洋側の気候区に入るが、高地であることから寒冷な中央高地型の気候がみられる。しかし吾妻川沿いの標高600mの谷底から、最高点の浅間隠山の1,756mまでと起伏に富んでおり、地理的条件も変化が大きいため、地区ごとに気候・気象に変化が見られる。降水量も地形により変化するが、年間降水量は関東平野各地域とほぼ等しい。降水量の年変化は日本海側と異なり冬季に少なく夏季に多い。

今回報告する山根Ⅲ遺跡は町域北部の吾妻川流域帶に所在し、吾妻川右岸の中位段丘上に立地している。調査地点の標高は620～626m位である。

### 第2節 周辺の遺跡

長野原町における遺跡の調査は、昭和29年に行われた勘場木遺跡の調査を始めとして、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畳1岩陰遺跡が発掘調査された。本町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した<sup>(1)</sup>。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と

平成 16 年 4 月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、令和 2 年 2 月現在で 225 の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている<sup>(2)</sup>。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成 24 年 4 月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が常時数カ所の発掘調査を継続して実施してきた地域である。町教育委員会でも本地域でこれまで生活再建事業として水源地域対策特別措置法（以下、水特法）および利根川・荒川水源地域対策基金（以下、基金）関連事業を実施してきたが、ダム本体の完成間近であり、発掘調査は本年度 9 月末で完了した<sup>(3)</sup>。

本遺跡を含む吾妻川流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第 2 図・第 1 表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないご注意願いたい。

## （1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述した応桑泥流や As-YPh が厚く堆積しており、それより下位の発掘調査が困難な状況がある。遺構外の遺物としては柳沢城跡（17）で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイバーが 1 点出土している。吾妻郡内においても旧石器時代遺跡は高山村に所在する新田西沢遺跡<sup>(4)</sup> でしか確認されていないというのが現状である。

このことは長野県側の浅間山麓でも同様で、厚く堆積した火山噴出物により旧石器時代面の発掘調査は困難である。長野県側の浅間山麓付近で発掘調査されている旧石器時代遺跡は、いずれも千曲川を挟み浅間山麓の対岸側で確認されている。

## （2）縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

### ①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畳 I 岩陰（20）がある。昭和 53 年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晚期の土器片・獸骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・燃糸文・押型文が認められる。平成 26 年度から國學院大學により学術調査が実施されている居家以岩陰群（88）でも草創期～晚期の土器片・石器・獸骨・人骨が出土している。平成 28～31（令和元）年度の調査では岩陰部の灰層中から遺存状態の良い早期中葉の埋葬人骨が 20 体確認されており、その数は今後も増えるだろう<sup>(5)</sup>。また横壁勝沼 I 遺跡（9）では草創期の楕形尖頭器が表探されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、榎木 II 遺跡（66）、立馬 I 遺跡（45）、立馬 III 遺跡（47）で早期の集落が検出されている。榎木 II 遺跡では早期前半燃糸文期の住居跡が 31 軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬 I 遺跡では燃糸文期の住居跡の他、沈線文（戸戸下層式）期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晚期までの土器片が連続し出土している。立馬 III 遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、本遺跡のほか、三平 I 遺跡（26）、三平 II 遺跡（27）、花畠遺跡（48）、中棚 I 遺跡（61）、幸神遺跡（70）、横壁中村遺跡（10）、長野原一本松遺跡（73）、西部地区では坪井遺跡（96）で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半燃糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畳 I 岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自

然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数とともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

## ②前期

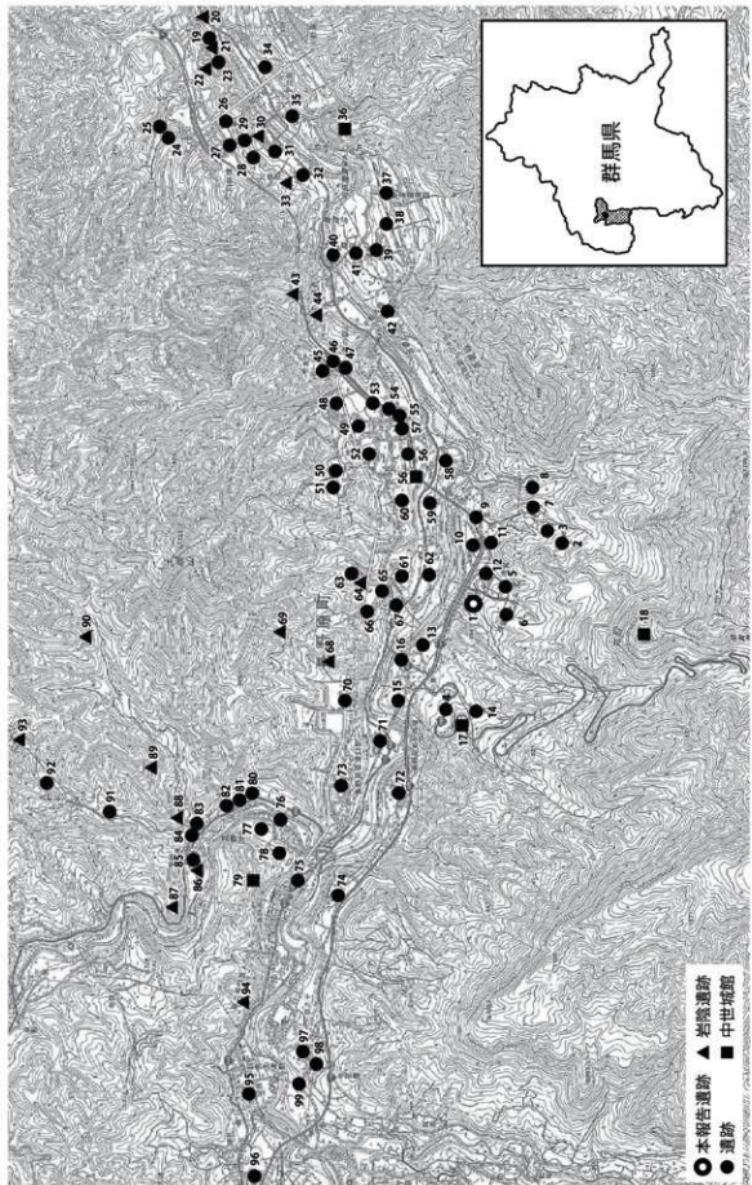
前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著であったが近年の調査で東部地区的該期の状況が明らかとなってきた。坪井遺跡では前期初頭（花積下層Ⅰ式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式と長野県で主体的な塙田式との共伴が初めて確認された。平成30年度に調査した赤羽根遺跡では、当該期の石器製作工房1軒と土坑4基が検出されている<sup>(6)</sup>。暮坪遺跡では前期前葉（ニッ木式期）の住居跡<sup>(7)</sup>、長欽Ⅱ遺跡（98）では前期前葉（岡山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡（49）で前期初頭の住居跡が15軒検出され、花積下層Ⅰ式土器が主体で塙田式土器が共伴するかたちで追認されている。榆木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は榆木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡（56）で前期後葉（諸磯式期）の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡（42）で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

## ③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区的丘陵上あるいは最上位段丘に立地する遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ケ台式期）の遺跡は榆木Ⅱ遺跡で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡（50）で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡（52）で土坑1基が確認されている。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡（46）で五領ケ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡で住居跡が1軒、幸神遺跡で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡（13）では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡（57）と横壁中村遺跡で焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡（28）では同時期の住居跡が12軒検出された。今年度、町営横壁土地改良事業の工事中に中期前半の水場遺構が発見され、山根Ⅴ遺跡（6）を追加した。全国的にみても古手の水場遺構である。西部地区では観奈遺跡<sup>(8)</sup>で中期前半の土坑8基、クヌギⅡ遺跡<sup>(9)</sup>で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、山岸Ⅱ遺跡<sup>(10)</sup>で少量の破片が認められたぐらいである。中期後半になると列石を伴う抛点集落が吾妻川流域地域に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡を筆頭として近年の調査により林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、東宮遺跡（31）、石川原遺跡が新たに加わり、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前6者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曾利B式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている。土器は大きく4系統（①加曾利E式土器〈北関東系〉、②曾利・唐草文系土器〈信州系〉、③「郷土」式土器〈①と②の融合型式〉、④柄倉Ⅱ式土器〈越後系〉）が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環状間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前6者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」<sup>(11)</sup>出土土器にも看取される。その他、向原遺跡（74）では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から抛点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡（71）で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居と確認され、敷石住居出

第1図 道跡周辺の河岸段丘分布図 ( $S = 1/35,000$ )





第2図 遊跡の位置と周辺の道路 ( $\times = 1/25,000$ )

現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡（72）でも中期末の遺存状態の良い敷石住居が検出され、町では平成30年度に移築保存を実施した。

#### ④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡<sup>(12)</sup>、古屋敷遺跡<sup>(13)</sup>、東部地区では上ノ平Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、林中原Ⅰ遺跡、石川原遺跡に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曾利B式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を残し、方形周縁を明瞭に残す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で3軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみである。石川原遺跡では後期後半～晚期前半の住居跡、配石遺構、水場遺構が多数検出されている。後期終末（安行1・2式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

#### ⑤晚期

晚期に関してはこれまで石畳Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晚期末葉（千綱式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晚期前半は前述の石川原遺跡で確認されてきているものの、依然少なく、後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晚期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晚期末葉の住居跡2軒、埋糞1基、上原Ⅳ遺跡・西ノ上遺跡（35）では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松木盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋設されており、ひとつが中沢氏のいう「水式突帯壺」<sup>(14)</sup>の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製壺が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡で水式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

### （3）弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晚期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共に共通しているようである。東部地区では本遺跡のほか長野原一本松遺跡で中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡では埋糞（再葬墓か）1基が検出され、東海地方に分布する櫻王式土器の糞が出土している。下原遺跡（59）では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡では前期末の短頭壺を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡で中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が5基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基検出されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畳遺跡（19）で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡（23）周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	町名	種別	時代	概要	備考
1	山根Ⅲ遺跡	29	集落跡 その他の 墓	鐵文・弥生・平安・ 近世	本遺跡、平成 16・17・29 ~ 31 年度調査 (町)、平成 10・15・18・20 年度調査 (事)。 鐵文中期後半住居跡、土坑、中古世の溝など。	文献 2,16,17,36,105,119,175
2	上野 I 遺跡	21	集落跡 その他の 墓	鐵文・平安	平成 29・30 年度調査 (町)。平安時代の住居跡、陥し穴など。	文献 2,36
3	上野 II 遺跡	22	集落跡 その他の 墓	鐵文・平安	平成 29・30 年度調査 (町)。鐵文中期の住居跡、平安時代の住居跡、陥し穴、溝など。	文献 2,36
4	西久保Ⅰ遺跡	32	その他の 墓	平安	平成 29 年度調査 (町)。平安時代の陥し穴。	文献 2
5	山根Ⅳ遺跡	30	集落跡 墓	鐵文・平安	平成 19・20 年度調査 (町)。鐵文中期後半の住居、土坑など。	文献 2,17,36
6	山根Ⅴ遺跡	225	散布地	鐵文	平成 30 年度調査 (町)。水槽構造、鐵文時代中期の土器。	
7	横根勝沼 I 遺跡	223	その他の 墓	平安	平成 29・30 年度調査 (町)。平安時代の陥し穴。	文献 36
8	横根勝沼 II 遺跡	224	その他の 墓	平安	平成 29・30 年度調査 (町)。平安時代の住居跡、陥し穴、近世の石垣など。	文献 36
9	横根勝沼 II 遺跡	23	集落跡 墓 その他の 墓	鐵文・弥生・平安・ 中世・近世	平成 6・7・10 年度調査 (事)。鐵文土坑数基。積形先史銅器 1 点発見。平安住居跡 1 軒検出。	文献 2,105,175 「島遺跡地図」 No.33 18 旧宿泊施設 (東平野町)
10	横根中村遺跡	24	集落跡 墓 その他の 墓	鐵文・弥生・平安・ 中世・近世	平成 8・9・20・29・30 年度調査 (事)。鐵文中期後半～後期を中心とした断続集落跡、平安時代跡を含めて 250 軒以上を検出。中世後半立柱建物跡、壁石建物、土礫堆、塙など多数検出。	文献 2,106,108,110,113,117,122, 123,29,29 ~ 132,135,139,142, 173,174,191 ~ 193,199,212 「島遺跡地図」 No.31 18 旧宿泊施設 (東平野町)
11	山根 I 遺跡	26	散布地	鐵文・平安	平成 28・29 年度調査 (町)。磨製石斧、石器、石碑などの石遺跡。	文献 2,33,36 「島遺跡地図」 No.31 18 旧宿泊施設 (東平野町)
12	山根 II 遺跡	28	散布地	平安	平安時代の散在地。	文献 2
13	西久保 I 遺跡	31	集落跡 墓 中世・近世	鐵文・弥生・平安・ 中世・近世	平成 6・10・12・29 年度調査 (事)。鐵文中期末葉の散石住居跡、水堀道構など。	文献 2,105,163,184,185,211
14	西久保 II 遺跡	33	散布地	不明		文献 2
15	西久保 IV 遺跡	216	その他の 墓	鐵文・平安・近世	平成 17・26 年度調査 (町)。平成 12・21・23・30・31 年度調査 (事)。鐵文後期前半立柱建物跡、平安時代住居跡、天明泥流下の指跡、泥流の天端を確認。道跡、溝、円錐埴輪。	文献 32,137,178,180
16	西久保 V 遺跡	222	集落跡	鐵文・弥生・中世・ 近世	平成 27 年度調査 (町)。平成 28・29 年度調査 (事)。天明泥流下の水田跡、鐵文中期後半～世紀前半の中期前の土器・陶器。	文献 33,163,183 ~ 185,185,210,211
17	柳沢城跡	35	城跡	旧石器・鐵文・中世	平成 4・5 年度調査 (町)。世紀の初期。壘切、土層、礎石、應曲輪、石組道築、溝、陶器類、鉄製品、飼料品、石臼などを検出。	文献 1,2,54,46,50
18	丸岩城跡	34	城跡	中世	土壁と岩場が併存。	文献 1,24,41,46
19	石畠遺跡	21	散布地 その他の 墓	鐵文・弥生・近世	平成 7・9・10・20・29・31 年度調査 (事)。天明泥流下の塩。鐵文前期包含層、弥生後期塩跡。	文献 2,105,184,211
20	石畠 I 墓葬	9	墓	鐵文・中世・近世	昭和 53 年度調査 (墓)。平成 29 ~ 31 年度調査 (事)。鐵文草創期～商周の土器片、獸耳尊、人骨など。天明泥流で埋没した塙跡、道など。	文献 2,184,211
21	石畠 II 墓葬	10	その他の 墓	不明	若塙跡。	文献 2
22	二社平野跡	11	その他の 墓	不明	若塙跡。	文献 2
23	二社平野遺跡	209	散布地	鐵文・弥生・平安・ 近世	平成 8・10・28・29・30 年度調査 (事)。弥生後期土器片。天明泥流下の塩。	文献 44,136,137,183 ~ 185 210,211
24	温井 I 遺跡	2	散布地	鐵文・平安	鐵文中期散在地。	文献 2
25	温井 II 遺跡	2	散布地	鐵文	鐵文中期散在地。	文献 5
26	三平 I 遺跡	3	集落跡	鐵文・弥生・ 平安・近世	平成 16・26 年度調査 (町)。平成 16・17・18・24・25・30 年度調査 (事)。鐵文中期前半の集落跡、弥生後期～中世の土器。平安時代の陥し穴群、竪穴式住居跡。近世の竪柱建物跡。引金具をはじめとして、各時代とも良好な遺跡と其具性を認めらる。	文献 2,27,32,105,116,173,174, 179,180,212
27	三平 II 遺跡	4	集落跡	鐵文・平安	平成 16 年度調査 (事)。鐵文草創期～前期の土器、石器多量。竪柱建物跡 7 構造ほかを含む中世早期敷地。	文献 2,116,173
28	上ノ平 I 遺跡	5	集落跡	鐵文・平安・中世・ 近世	平成 18・19・28 年度調査 (事)。鐵文中期中葉～後期初頭住居跡、陥し穴多量。平安時代の陥し穴群、竪穴式住居跡。近世の竪柱建物跡。引金具をはじめとして、各時代とも良好な遺跡と其具性を認めらる。	文献 2,124,147,153,175,176, 183,200,210
29	上ノ平 II 遺跡	6	散布地	鐵文・平安	鐵文・平安時代の散地。	文献 2
30	三ツ室岩跡	12	その他の 墓	近世	平成 28 年度 (墓)。岩陰遺跡。江戸時代中期以前の墓地跡。堂室・石仏群は平成 20 年度に本解説。	文献 2,183,210
31	東宮遺跡	208	集落跡 墓	鐵文・近世	平成 12・13・14・15・16・17・26・27・28・29・30 年度調査 (事)。鐵文中期～後期の大規模集落、天明泥流下の屢々敷。建物跡、塙跡など。	文献 105,124,135,149,151,176, 178,181 ~ 185,202,210 ~ 215,220,225,227,231,233
32	西宮遺跡	7	集落跡 その他の 墓	平安・近世	平成 20・26 ~ 31 年度調査 (事)。天明泥流下の屢々敷と付属建物、泥塗壁況層 5 層以上。復旧済 10 数軒。ヤクニラ、小屋など。	文献 2,152,177,181 ~ 185,202, 210 ~ 212,215,221,222,231
33	西宮古墳	13	その他の 墓	近世	平成 26 年度調査 (事)。若塙遺跡。石造物を掘るために台座・陶器器・五輪塔など被出。	文献 2,152
34	下原ノ原遺跡	217	集落跡 墓	鐵文・弥生・平安・ 中世・近世	平成 27・28・29・30 年度調査 (事)。鐵文中期の土器片。平安時代の住居跡、天明泥流下の塩。道など。	文献 136,157,182 ~ 184,201,211,217
35	西ノ上道路	212	その他の 墓	鐵文・中世・近世	平成 16・17・18・19・20・21・22・23 年度調査 (事)。天明泥流下の塩。各時代の陥し穴。	文献 183,202,211,212
36	金花山船跡	207	城跡	中世	昭和 12 年度調査 (事)。鐵文中期の土器片。陥し穴などと確認。明治期の「川原瀬真園」に「トリアニア」との記載あり。	文献 15
37	川原瀬中原 I 遺跡	16	散布地	鐵文	平成 19 年度調査 (町)。チャート片出土。	文献 2,19 「田中原 I 遺跡」
38	川原瀬中原 II 遺跡	18	散布地	鐵文	平成 17 年度調査 (町)。	文献 2,17 「田中原 II 遺跡」
39	川原瀬中原 III 遺跡	19	散布地 その他の 墓	鐵文・平安・近世	平成 28 年度調査 (事)。鐵文中期後半住居跡、遺物包含層、平安の陥し穴。	文献 2,155,183,210 「田中原 III 遺跡」
40	前原遺跡	210	その他の 墓	近世	平成 29 年度調査 (事)。天明泥流下の塩。	文献 184,185,211
41	石川原遺跡	17	集落跡 墓	鐵文・平安・中世・ 近世	平成 20・25・31 年度調査 (事)。鐵文中期～後期の大規模集落跡。後期の配石、水堀道構など。天明泥流下の塩。	文献 2,156,177,182 ~ 185,202, 210 ~ 212,216,231,231
42	川原瀬勝沼遺跡	206	散布地 その他の 墓	鐵文・平安・近世	平成 9・15・16・28・29・30・31 年度調査 (事)。鐵文中期の理塗葺 2 基。平安住居跡 3 軒。天明泥流下の塩。	文献 1,209,164,173,183,185, 198,210
43	久森 I 右宮群	53	その他の 墓	不明	若塙跡。若塙 3 軒にわたる。	文献 2
44	久森 II 右宮群	54	その他の 墓	不明	若塙跡。	文献 2
45	立馬 I 遺跡	37	集落跡 墓	鐵文・弥生・平安・ 中世・近世	昭和 13・14・17・18 年度調査 (事)。鐵文早期前半住居跡、包含遺物多量。廻塙住居跡。中世中古住居跡、積石塙。平安住居跡のほか、鐵文・平安の陥し穴多量。	文献 2,114,174
46	立馬 II 遺跡	213	集落跡	鐵文・弥生・平安	昭和 14・15・16・17・18 年度調査 (事)。鐵文中期後半住居跡 11 軒。鐵文早期包含層遺物。	文献 111,199
47	立馬 III 遺跡	215	集落跡	鐵文・平安	平成 19 年度調査 (事)。鐵文中期後半～後期の集落跡。鐵文住居跡 5 軒。甕状構 2 基のほか土坑・石坑など。平安住居跡、陥し穴多量。中古世の土坑・溝。	文献 126,176,201
48	花畠遺跡	205	集落跡	鐵文・平安	平成 10 年～12 年度調査 (事)。平安住居跡のほか、陥し穴多量検出。	文献 2,105

49	上原 I 道跡	41	集落跡 散布地	城文・平安・近世	平成 18・23・24 年度調査（町）。平成 19・24 年度調査（町）。城文早朝未～朝朝中期、古墳前期未土器。古墳前期住居跡、中壩土器。平安住居跡、船 stitched の柱を検出。	文献 2,18,26,31,105,144,179
50	上原 II 道跡	42	散布地	平安	平成 18・23 年度調査（町）。平成 16 年度調査（事）。城文中壩後頭頂穴状通路、燒土構造、土器。平安除穴。	文献 2,18,31,173
51	上原 III 道跡	43	集落跡 散布地	城文・弥生・平安	平成 18・23 年度調査（町）。平成 25・27 年度調査（事）。城文中壩後半包食層、弥生中期土器。平安住居跡、工房、住居跡、土器・構造。船 stitched の穴など。	文献 2,18,31,144,148,180,182
52	上原 IV 道跡	44	散布地	城文・近世	平成 18・23 年度調査（町）。平成 20・21 年度調査（事）。城文中壩中期土器。後頭頂穴状通路、船 stitched、南面へ舟形包食層。古墳後期住居跡、平安住居跡、中壩土器など。	文献 2,12,18,20,31,119,137,178
53	東原 I 道跡	38	散布地	城文・平安・近世	昭和 17・18 年度調査（群大）。平成 14・22～30・31 年度調査（町）。平成 16・19・21・30 年度調査（町）。城文中期半～後期の複数点検出。城文後期未住居跡、土器。中世の「城壁」、豊穴状通路、区画溝、孤立柱建物跡。	文献 2,17,18,28,32,131,177
54	東原 II 道跡	39	散布地	城文	平成 15・18 年度調査（町）。平成 20・21 年度調査（事）。城文早期～後期の合谷帯、土器。平安除穴。	文献 2,133,177,212
55	東原 III 道跡	40	散布地	平安・近世	昭和 17 年度調査（群大）。平成 14・20・24 年度調査（町）。平成 20 年度調査（事）。城文前期～中期後半の複数点検出。城文後期未住居跡、土器。石碑・構造。	文献 2,14,18,133,177,178
56	林中原 I 道跡	45	集落跡 城壁跡	城文・平安・中世・近世	昭和 17 年度調査（群大）。平成 14～22・30・31 年度調査（町）。平成 16・19・21・30 年度調査（町）。城文中期半～後期の複数点検出。城文後期未住居跡、土器。中世の「城壁」、豊穴状通路、区画溝、孤立柱建物跡。	文献 2,12,14～18,22,31,141,173,176～178,185,201,211,212
57	林中原 II 道跡	46	集落跡 散布地	城文・苏世・平安・近世	平成 15～19・21・22・29 年度調査（町）。平成 16・20・21 年度調査（事）。城文中壩中期～後期の複数点検出。墓基・石室。弥生中期未～朝朝中期半土器。再斎墓基、中壩中期半住居跡 4 箇。中世近傍立柱建物跡。	文献 5,158,161,174,178,179,203,219
58	下田道跡	47	集落跡 その他	城文・平安・中世・近世	平成 6・7・9・15・25・26・28～31 年度調査（事）。城文時代の孤立柱建物跡、中世の土壙跡、天明泥流に埋没した家屋、細路など。	文献 2,105,150,180,181,181
59	下原道跡	204	集落跡 その他	城文・弥生・古墳・平安・中世	平成 12・13・15・16・19・20 年度調査（事）。城文時代の転用型住居跡、古墳後期住居跡、平安住居跡、中世の廻敷跡、中世の廻敷跡、中世の廻敷跡 3 面など。	文献 2,105,106,115,159,173,184,185,211
60	林尻原道跡	48	集落跡	城文・古墳・平安・中世	平成 14～16・18～20・24 年度調査（町）。平成 24・27 年度調査（事）。城文中期後期～後期住居跡、中世の廻敷跡など。	文献 2,12,14～16,18,19,21,24,144,179,182,185「京瀬跡地図」、No.3127 旧官道跡（神社前通路）。
61	中壱 I 道跡	49	散布地	城文・平安・中世・近世	平成 18～23・25・26・28～30 年度調査（事）。城文早期～中期の廻敷跡、中世の廻敷跡、中世の廻敷跡、中世の廻敷跡など。	文献 2,18,31,34,107,160,184,185
62	中壱 II 道跡	203	その他	城文・平安・中世・近世	平成 11～13・15・24～26・30 年度調査（事）。平安住居跡、中世の廻敷跡、中世の廻敷跡など。	文献 2,106,183,184,210～212
63	二反沢道跡	52	寺社その他	中世・近世	平成 12 年度調査（事）。中世の石碑を伴う造跡（東大廬院跡）、鐵治闇通造跡、近傍の細路。	文献 2,112「旧大廬院跡」
64	津河原眼鏡窓	55	その他	不明	岩落跡、「津河原眼鏡」の堂宇と石仏群。	文献 2
65	桜木 I 道跡	50	散布地	城文・平安	平成 10・21 年度調査（事）。平安住居跡、カマド跡、土壙。集石、江戸壁石建物跡など。	文献 2,137,178
66	桜木 II 道跡	51	集落跡	城文・平安・中世・近世	平成 12 年度調査（町）。平成 12・13・16・17 年度調査（事）。城文早期半土器系系統、中世初期柱建物跡。	文献 2,10,20,12,27,173,174,194,196,199
67	桜木 III 道跡	202	散布地	城文・弥生・平安・中世	平成 10 年度調査（事）。城文跡～後期、弥生中期の包含層。	文献 105
68	御鶴山岩場	57	その他	不明	御鶴山岩場。	文献 2
69	櫛ヶ沢岩場	56	その他	城文	岩階道跡、打製石出土。	文献 2
70	幸樽道跡	62	集落跡 その他	城文・平安・近世	平成 21 年度調査（町）。平成 4・5・14・17・18 年度調査（事）。城文中壩中期未住居跡、廻敷跡、土壙。	文献 2,23,119,174
71	尾坂道跡	201	集落跡 その他	城文・近世	平成 26 年度調査（町）。平成 6・7・11・18～23・25・26～30 年度調査（事）。城文中壩中期未住居跡、廻敷跡、土壙。	文献 105,146,154,166,175～181,183,184,200,204,211,212
72	久々戸道跡	200	集落跡 その他	城文・弥生・平安・近世	平成 19 年度調査（町）。平成 6～12・14・15・27・28 年度調査（事）。城文中期未住居跡、廻敷跡、土壙。城文中期未住居跡、廻敷跡、土壙。平安住居跡、中世柱立柱建物跡など多数検出。	文献 9,47,106,107,148,182,183,193,210,212,234
73	長野原一木松道跡	63	集落跡	城文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成 22 年度調査（町）。平成 6～20 年度調査（事）。城文中期後半～後期の住居跡を中心とする点検出。平安住居跡、中世柱立柱建物跡など多数検出。	文献 1,2,20,23,104,118,121,125,28,131,140,173,174,176,177,186,199「一木松道跡」
74	向原道跡	75	集落跡 その他	城文・弥生・平安	平成 5・19 年度調査（町）。	文献 6,19
75	町道跡	219	集落跡 その他	城文・近世	平成 23～25・30 年度調査（町）。天明泥流で埋没した集落・生産路。	文献 3,27,143,179,212
76	桜木 I 道跡	72	集落跡 その他	平安・近世・近代	平成 16・22・24～25・26・30 年度調査（町）。近世石碑建物、天明泥流、溝、ヤッカラ、復旧築。近代ガーラー橋塗石柱。	文献 2,16,23,28,29,32,38,63
77	桜木 II 道跡	73	散布地	城文・平安	黒塙跡、祖母孫跡。平成 26 年度調査（町）。	文献 2,33,28
78	桜木 III 道跡	74	散布地	城文	石疊、石塚。	文献 2
79	長野原一村跡	85	城壁跡	中世・近世	平成 23 年度調査（事）。天明泥流下の祖跡。	文献 2,28,38,40,41,43,46,47,51,141,205
80	東貝掛 I 道跡	64	散布地	城文	平成 21 年度調査（町）。平成 4・5・14・17・18 年度調査（事）。城文中期未住居跡、廻敷跡、土壙。	文献 2
81	東貝掛 II 道跡	65	散布地	城文	平成 21 年度調査（町）。平成 4・5・14・17・18 年度調査（事）。城文中期未住居跡、廻敷跡、土壙。	文献 2
82	東貝掛 III 道跡	66	散布地	城文	平成 24・25 年度調査（町）。チャート採集。近世天明泥流 3 面。	文献 2,28,29,32,38,63
83	筒瀬 I 道跡	67	散布地	城文・平安	石斧採集。	文献 2
84	筒瀬 II 道跡	68	散布地	城文	石斧採集。	文献 2
85	筒瀬 III 道跡	69	散布地	城文・平安	石斧採集。	文献 2
86	筒瀬岩窟群	82	その他	不明	岩階 2 扉所にわたる。	文献 2
87	油井岩窟群	81	その他	城文・弥生	岩階 4 扉所にわたる。	文献 2
88	麻原山岩窟群	80	その他	城文・弥生	平成 26～31 年度調査（国学院大學）。岩階 6 扉所にわたる。	文献 2,53,167～172
89	万ノ沢岩場	79	その他	不明	岩階。	文献 2
90	御曾呂原	78	その他	不明	御曾呂原。	文献 2
91	火打花 I 道跡	70	散布地	城文	火打花。	文献 2
92	火打花 II 道跡	71	散布地	城文	火打花出土。	文献 2
93	仙下岩場	76	その他	不明	岩階。	文献 2
94	西岩下岩場群	83	その他	不明	岩階 2 扉所にわたる。	文献 2
95	小林家屋敷跡	211	城跡	近世	平成 14・30 年度調査（町）。天明泥流下の廻敷、磯石建物、土壙、石組など。分層性小助筋左右陣門裏の一部。	文献 11～13,36
96	坪井道跡	86	集落跡	城文・平安	平成 4・10・12・13・14・24・26・29 年度調査（町）。城文前期初期頃植木下層 1 式、坪井式土器。朝中期後の廻敷の集落跡。平安時代集落。	文献 4,8,10～12,26,28,32,36
97	長岐 I 道跡	126	集落跡	平安	平成 15 年度調査（町）。平安時代の廻敷跡。	文献 14
98	長岐 II 道跡	127	集落跡	城文・平安	平成 2・3・21・28・30 年度調査（町）。城文時代の廻敷跡・土器。平安時代の廻敷跡。	文献 4,12,22,33
99	臼杵井村跡	143	村落跡	近世	昭和 55 年度調査（町）。天明泥流で埋没した村落・廻敷跡や雨水池などを検出。衝倒台場上に墓地が残る。	文献 2,47,49,52,60,64,91,96

#### (4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原本一松遺跡、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡(60)で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに統いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡で同時期の住居跡1軒の他、土師器(片)がまとまって出土している。最近の調査では上原IV遺跡でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は周期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原I遺跡で前期と考えられる住居跡からS字状口縁台付壺や咲形土器が出土し、中期の高环を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区的「鉄塚」、与喜屋地区的「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか(てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区的「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

#### (5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾II遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、绳文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡、向原遺跡、長畝I遺跡(97)、長畝II遺跡、山岸II遺跡、東部地区では東宮遺跡、上ノ平I遺跡、三平I遺跡、下湯原遺跡(34)、西ノ上遺跡、石川原遺跡、川原湯勝沼遺跡、立馬I遺跡、東原I遺跡(53)、榎木I遺跡(65)、榎木II遺跡、花畠遺跡、下原遺跡、中棚I遺跡、上原I遺跡、上原III遺跡(51)、上原IV遺跡、林宮原遺跡、横堀勝沼I遺跡、横堀勝沼II遺跡(8)、山根IV遺跡(5)、上野I遺跡(2)、上野II遺跡(3)、横壁中村遺跡、長野原本一松遺跡、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で榎木II遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長・・三家」の墨書き土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平I遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞觀永寶」が出土しており注目される。この他、上原III遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥穴29基など、中棚I遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一边が6mを超える大型住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書きが大量に出土しておりその性格が注目される。

#### (6) 中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡<sup>(15)</sup>、長野原城跡(79)、丸岩城跡(18)、柳沢城跡、金花山砦跡(36)などがあり、その他に林城跡(56)、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として「加沢記」にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製

品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリニアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して掘切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになってい。それらを例挙すると立馬Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、榎木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡（63）、下原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、榎木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

## （7）近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめしており、2.4~2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は伊岩火山の活動期で浅間板鼻黃色輕石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により禪文時代中期の浅間D輕石（As-D）、4世紀の浅間C輕石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B輕石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A輕石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砂流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺觀音堂の石段」、「十日ノ窟」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが<sup>(16)</sup>、翌年本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡（99）の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている（95）。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった<sup>(17)</sup>。さらに平成20年度に草木原遺跡<sup>(18)</sup>、平成23年度に小滝Ⅱ遺跡<sup>(19)</sup>で天明泥流に埋没した烟跡が検出され、立石村・羽根尾村の被災状況も確認された。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを例挙すると、町遺跡（75）、長野原城跡、嶋木Ⅰ遺跡（76）、東貝瀬Ⅲ遺跡（82）、下田遺跡（58）、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡（62）、西宮遺跡（32）、東宮遺跡、石川原遺跡、石畠遺跡（19）、西ノ上遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡（15）、西久保Ⅴ遺跡（16）、尾坂遺跡、久々戸遺跡などがある。これらの遺跡では主として烟跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まつた烟景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位烟」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡・西宮遺跡・石川原遺跡・町遺跡・尾坂遺跡・下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没烟とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡、二

反沢遺跡、榆木I遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡が該当する。このうち上原IV遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

### 第3節 既往の調査

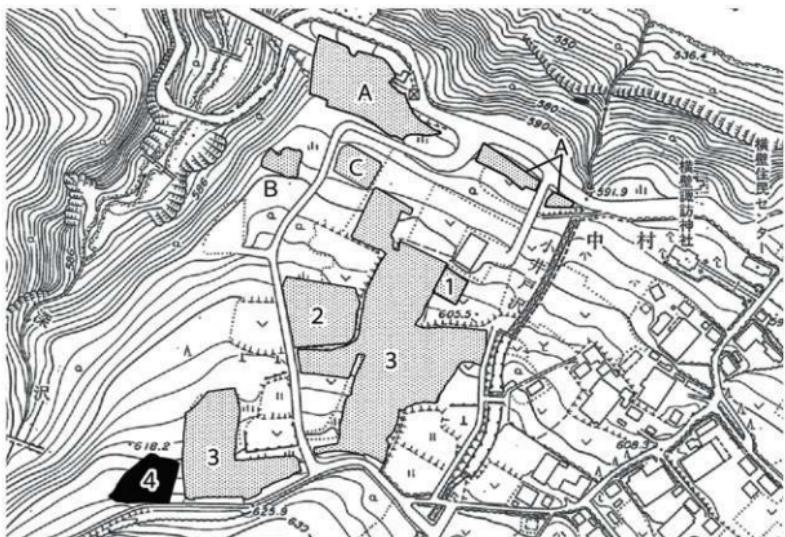
本遺跡は過去に長野原町教育委員会（以下、町教委）で3次、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団）で3次にわたる調査が実施されており、今回の調査は第4次調査にあたる（第3図・第2表）。

町教委の第1・2次調査は平成16・17年に個人専用住宅建設に先行して実施された（第3図1・2）。ともにトレンチ調査での顯著な遺構・遺物を検出するには至らなかった。

第3次調査は平成29年度に町営横壁土地改良事業に先行して実施された。比較的平坦な畠地から掘り込みが数基検出され、その中には平安時代の特徴を有する陥穴が含まれていた。付近から縄文土器が出土していたことから、周辺に縄文・平安時代の集落跡が存在することが想定された。翌年にはその確認調査の結果をもとに本調査が実施された（第3図3）。住居跡は確認されなかったが、縄文早期の土坑9基のほか、平安時代の陥穴4基が検出された。また遺構外であるが古墳時代前期のS字彫の口縁部片が2点出土している。

事業団の第1次調査は平成10年度に町道拡幅・深沢橋橋台建設に先行して実施された（第3図A）。縄文中期後半の住居跡と土坑17基が検出された。

第2・3次調査は平成13・18年度に国道145号線敷設に先行して実施された（第3図B・C）。縄文中期後半の住居跡3軒・土坑28基、縄文早期後半～弥生中期前半の包含層、古代～中近世の土坑4基、近世以降の土坑5基・溝1条が検出された。



第3図 調査地点位置図 (S=1/2,500)

第2表 山根Ⅲ遺跡調査一覧（第3図の番号と対応）

番号	調査年度	調査機関	原種 因類	調査面積 (開発面積)	概 要	備 考
1	平成16年度	長野原町教育委員会	個人専用住宅 確認調査	10m <sup>2</sup> (1,937m <sup>2</sup> )	遺構・遺物なし。	文献16
2	平成17年度	"	個人専用住宅 確認調査	10m <sup>2</sup> (1,282m <sup>2</sup> )	遺構・遺物なし。	文献17
3	平成29年度	"	町営横壁土地改良 事業試掘確認調査	276m <sup>2</sup> (77,471m <sup>2</sup> )	縄文土坑、平安土坑	未報告 (印刷中)
	平成30年度		町営横壁土地改良 事業本調査	6,419m <sup>2</sup> (n <sup>2</sup> )	縄文早期土坑9、平安 陥し穴4	
4	令和元年度	"	横壁地区農業經營 近代化施設整備事業 本調査	700m <sup>2</sup> (1,000m <sup>2</sup> )	土坑7	本報告
A	平成10年度	(財)群馬県埋蔵 文化財調査事業団	町道拡幅・深沢橋橋台 本調査	2,032 m <sup>2</sup> (2,032m <sup>2</sup> )	縄文中期後半住居1・ 中期土坑4・中期包含 層、不明土坑	文献105
B	平成13年度	"	国道145号線 本調査	900m <sup>2</sup> (900m <sup>2</sup> )	縄文中期後半住居3・ 土坑28、縄文早期後 半～弥生中期前半包含 層、古代～中近世土坑	文献119
C	平成18年度			280m <sup>2</sup> (280m <sup>2</sup> )	4・近世以降土坑5・ 溝1	

#### 第4節 基本土層

本遺跡の基本層序は第5図のA地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである（第5図）。

##### 第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、浅間A軽石（以下、AS-A 軽石）を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

##### 第II層 黒褐色土

黄褐色軽石粒を僅かに含んでいる。いわゆる黒ボク層に相当する。締まりはやや弱い。

##### 第III層 暗褐色土

ローム粒を少量、ロームブロック（φ～1cm大）を微量含んでいる。全体的に茶褐色を呈し、締まりは強い。

##### 第IV層 暗褐色土

ローム粒を少量、ロームブロック（φ～1cm大）を微量含んでいる。締まりは強い。平安時代の遺構はこの層を掘り込んで構築されている。

第V層 暗褐色土

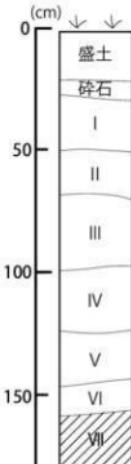
ローム粒を含み、ロームブロック（～1cm大）を少量含んでいる。締まりは強い。谷部にしか認められない層である。

第VI層 明褐色土

ローム粒を多量、ロームブロックを微量含んでいる。いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第VII層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



第4図 基本土層図 (S=1/20)

註

1. 文献2。
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま 遺跡・文化財」(<http://www2.wagmap.jp/pref-gumma/top/select.asp&npr=dtp=86&pl=3>)で参照願いたい。本書では第2表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 発掘調査が平成31（令和元）年度まで、整理調査・報告書作成が令和2年度までの予定である。
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 前底部においても2mにもおよぶ厚さの灰層が検出されており、獸骨や押型文土器が出土している。今後は岩陰部の灰層との関係の解明が注目される。また平成30年度、考古学研究室によりリサーチデザインを示した遺跡のパンフレットが作成された。
6. 平成30・31（令和元）年度、太陽光発電所建設に伴い、本調査を実施した。現在報告書を印刷中である。
7. 文献9。
8. 文献35。
9. 文献3。
10. 文献25。
11. 文献42・45・46・50・53など。平成30年度から3カ年計画で整備事業を進めている。
12. 文献7。
13. 文献1。
14. 中沢道彦 1998 「「水1式」の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市水道跡発掘調査資料図譜』第三冊 水道跡発掘調査資料図譜刊行会
15. 文献1・2・41・43・46・47・65など。
16. 姫恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』  
1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報 (よみがえる延命寺)』
- その他文献45・49・53など。
17. 水特法関連の試掘確認調査は別稿にて報告する。現在印刷中である。なお、「背面金剛塔」は雲林寺参道に安置してある。
18. 文献20。
19. 文献26。

## 参考文献（第1・2表の文献番号に対応）

番号

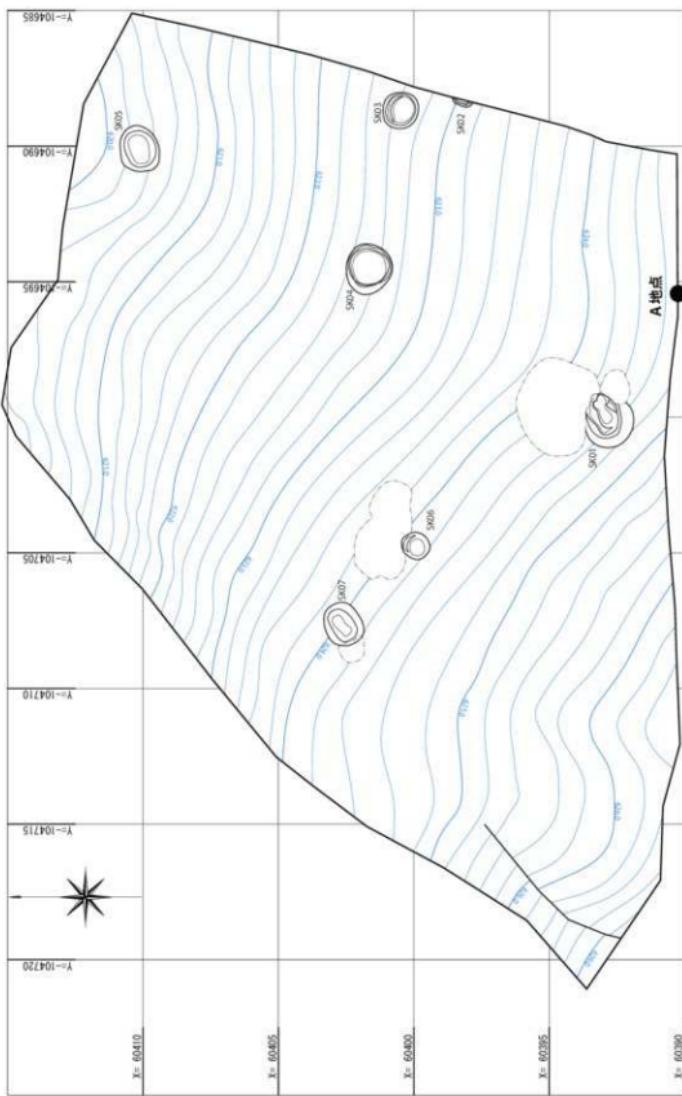
1. 長野原町 1976 「長野原町誌」上巻
2. 長野原町教育委員会 1990 「長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－」長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1990 「町II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
4. 長野原町教育委員会 1992 「長野II遺跡・坪井遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
5. 長野原町教育委員会 1995 「町II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
6. 長野原町教育委員会 1996 「町II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
7. 長野原町教育委員会 1996 「湯原畠遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
8. 長野原町教育委員会 2000 「坪井遺跡II」長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
9. 長野原町教育委員会 2001 「町II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
10. 長野原町教育委員会 2002 「町内遺跡I」長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
11. 長野原町教育委員会 2003 「町内遺跡II」長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
12. 長野原町教育委員会 2003 「町内遺跡III」長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
13. 長野原町教育委員会 2005 「小林家屋敷跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
14. 長野原町教育委員会 2004 「町内遺跡IV」長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
15. 長野原町教育委員会 2004 「林宮原遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
16. 長野原町教育委員会 2005 「町内遺跡V」長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
17. 長野原町教育委員会 2006 「町内遺跡VI」長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
18. 長野原町教育委員会 2006 「町内遺跡VII」長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
19. 長野原町教育委員会 2009 「町内遺跡VIII」長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
20. 長野原町教育委員会 2010 「町内遺跡IX」長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
21. 長野原町教育委員会 2010 「林宮原I遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
22. 長野原町教育委員会 2011 「町内遺跡X」長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
23. 長野原町教育委員会 2012 「町内遺跡XI」長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
24. 長野原町教育委員会 2012 「林宮原II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
25. 両毛電力郡馬支店・長野原町教育委員会 2013 「山岸II遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第24集
26. 長野原町教育委員会 2013 「町内遺跡XII」長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
27. 長野原町教育委員会 2013 「三平I遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第26集
28. 長野原町教育委員会 2014 「町内遺跡XIII」長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
29. 長野原町教育委員会 2014 「町内遺跡XIV」長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
30. 湖東京電力郡馬支店・長野原町教育委員会 2014 「林原作遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第29集
31. 長野原町教育委員会 2015 「林地区遺跡群」長野原町埋蔵文化財調査報告第30集
32. 長野原町教育委員会 2016 「町内遺跡XV」長野原町埋蔵文化財調査報告第31集
33. 長野原町教育委員会 2017 「町内遺跡XVI」長野原町埋蔵文化財調査報告第32集
34. 長野原町教育委員会 2018 「町内遺跡XVII」長野原町埋蔵文化財調査報告第33集
35. 長野原町教育委員会 2018 「観余遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第34集
36. 長野原町教育委員会 2019 「町内遺跡XVIII」長野原町埋蔵文化財調査報告第35集
37. 長野原町教育委員会 2019 「長野原町地区遺跡群」長野原町埋蔵文化財調査報告第36集
38. 長野原町教育委員会 2019 「長野原町地区遺跡群（2）」長野原町埋蔵文化財調査報告第37集
39. 長野原町教育委員会 2020 「町内遺跡XIX」長野原町埋蔵文化財調査報告第38集
40. 小池勘治郎編 1936 「群馬県」叢書教科書
41. 山崎一・山口正夫 1972 「古事記傳説史」
42. 塩野新一 1972 「群馬県古墳群長野原町（群馬県指定史跡）跡場木遺跡」
43. 山崎一 1978 「群馬県古墳群の研究」上巻
44. 中・阿久 1979 「石燈籠道路略歴」長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
45. 群馬県 1988 「群馬県史」資料編1
46. 群馬県教育委員会 1988 「群馬県の中世城郭跡」
47. 長野原町教育委員会 1988 「長野原町の文化財」
48. 長野原町 1993 「長野原町の自然」八ヶ場ダム湖予定地及び関連地域文化財調査報告書
49. 群馬県立歴史博物館 1995 第52回企画展「天明の刻」特設
50. 上毛新聞社 1999 「群馬県遺跡大辞典」
51. 芽懸野原宮文化資料館 2000 第30回企画展「利根川流域の縄文草創期」
52. かみづの里博物館 2000 第6回特別展「縄について考える」
53. 群馬県教育委員会 2001 「群馬の史跡（原始古代編）」
54. 芽懸野原宮文化資料館 2004 第39回企画展「成の光った土器」
55. 群馬県立歴史博物館 2004 第77回企画展「新見児考古遺編・群馬発掘情報」石室の入り口を通り抜けると…」
56. 浅間文ミュージアム 2004 「浅間山大噴火」
57. 群馬県立教育学園 2004 「町崎首在堵博士」調査収集古遺物・調査資料目録」雄山閣
58. (財)群理文編 2005 「群馬の遺跡2 編文時代」
59. (財)群理文編 2005 「群馬の遺跡3 中世～近代」
60. かみづの里博物館 2007 第16回特別展「江戸時代・浅間山大噴火」
61. 原田昌幸 2007 「日本の美術No.495 瓷文土器」早創期・早期・至文堂
62. 小林達哉編 2008 「絶賛織文土器」

63. 関 優明 2010 「浅間山大噴火の爪痕―天明三年浅間山災害遺跡―」新泉社
64. (公財) 郡理文編 2013 「自然災害と考古学」
65. 宮坂利男 2015 「伝説をめぐる墳墓の山並と館」上野編・戎光祥出版
66. 群馬県教育委員会 2017 「群馬県古墳鑑賞―本文・一覧表編―」
67. 関 優明・諸田康成 1999 「『天明三年浅間山災害に関する地域的研究』」研究紀要16 (財) 郡理文
68. 白石光男・山口道弘 1999 「外輪原I遺跡出土の鍔文前期土器」『群馬考古学』第9号 群馬土器研究会
69. 富田季彦 2000 「外輪原I遺跡出土の男生土器」『群馬考古学手稿10』群馬土器研究会
70. 板井利雄 2000 「H系統の土器について-仮称「郷士式土器」成立の可能性」小諸市内3:三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷士遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡、深谷遺跡(本文編)」上島越古車道整理化文化財発掘調査報告書 1-長野県埋蔵文化財センター
71. 谷藤泰彦・関根重二・今井邦之 2002 「群馬県内出土の鍔文時代石製装身具集成」『研究紀要20』(財) 郡理文
72. 関根重二 2003 「群馬県における加曾利E式土器の地域相」『第16回鍔文セミナー 中期後半の再検討』鍔文セミナーの会
73. 石田 真 2003 「群馬県北西部における鍔文(の)辺の構築時期をめぐら一長野町の事例を中心として」『研究紀要22』(財) 郡理文
74. 関 優明 2003 「天明三年浅間山噴火災害遺跡の構造と変遷」『日本考古』吉川弘文館
75. 関 優明 2006 「天明泥流はどう流下したか?」『ぐんま史料研究24』群馬県立歴史館
76. 中央防災会議 2006 「1783年天明泥流・山中村遺跡報告書」内閣府
77. 藤巻幸男 2003 「鍔文時代中期の住居内構況について-横堀型中村遺跡見舞」『研究紀要25』(財) 郡理文
78. 谷藤泰彦 2007 「加曾利E式の系統を引く土器群-北関東における後期初期の様相-」『第20回鍔文セミナー 中期終末から後期初期の再検討』鍔文セミナーの会
79. 関根重二 2008 「浅間山を祀る鍔文土器」『研究紀要26』(財) 郡理文
80. 山口道弘 2009 「上ノ平遺跡31号坑括出土土器の再検討」『研究紀要27』(財) 郡理文
81. 藤巻幸男 2009 「八ヶ場ダム建設地域における調査遺跡-鍔文作成の試み-出土遺物総量把握の効用-」『研究紀要27』(財) 郡理文
82. 黒澤照弘・大西雅弘 2009 「茨城県、桶木県、群馬県内の江戸後期における生糸と通路」「江戸後期における生糸向け陶磁器の生産と流通」関東・東北・北海道編
83. 山口道弘 2010 「「撫版式」土器に対する再検討」『研究紀要28』(財) 郡理文
84. 橋本 淳 2010 「中部地方における鍔文早期沈銅鍔式土器の幅年-八ヶ場ダム開通遺跡出土資料の位置付け-」『研究紀要28』(財) 郡理文
85. 路木徳雄 2012 「鍔之内式土器研究の諸問題-縦に内式の横觀と周囲諸式型-」『第25回鍔文セミナー 鍔文後期土器研究の現状と課題』鍔文セミナーの会
86. 山口道弘 2013 「吾妻川中流域における鍔文時代中期後葉の土器種類相-加曾利E式古墳群を中心として-」『研究紀要31』(公財) 郡理文
87. 黒澤照弘 2013 「東宮遺跡-天明3年5月1日目の様相-」『江戸遺跡研究会和第133号』江戸遺跡研究会
88. 黒澤照弘 2013 「天明三年浅間山噴火災害と東宮遺跡」『群馬考古学マガジン』(666) ニュー・サイエンス社
89. 黒澤照弘 2013 「東宮遺跡における天明3年新嘗八五日の様相-調査成果から推測される天明泥流被害前の状況-」『研究紀要31』(公財) 郡理文
90. 伊藤美香・小原奈津子・黒澤照弘 2013 「東宮遺跡出土の鍔文遺物について」『研究紀要31』(公財) 郡理文
91. 大塚千春 2014 「天明三年浅間泥流整理遺跡の守隨標と高崎耕種」群馬県立女子大学第2附属馬サントリーサーフェロー研究報告集・群馬県立女子大学群馬学系センター
92. 山口道弘 2015 「吾妻川中流域における「郷士式」の一様相-報告書『長野原一本松遺跡(6)』を中心として」『研究紀要33』(公財) 郡理文
93. 小川卓也・宮田忠洋・向出博之 2015 「北関東地域における後期注土器の様相」『第28回鍔文セミナー 鍔文後期土器研究の現状と課題』鍔文セミナーの会
94. 藤巻幸男・鍋崎修一郎・能登健 2016 「群馬県長野原町横堀型中村遺跡の中近世墓と同地区における考古遺物の研究」『研究紀要34』(公財) 郡理文
95. 山口道弘 2016 「鍔文状D種横顕陰線文土器について-「鍔文模型」の掲示-」『地域考古学』地域考古学研究会
96. 大塚千春 2016 「天明3年浅間泥流下出土の守隨標」『群馬文化32号』群馬県地域文化研究協議会
97. 藤巻幸男・能登健 2016 「両幕制の検討-群馬県八ヶ場地域を例にして-」『群馬文化32号』群馬県地域文化研究協議会
98. 谷藤泰彦・谷底昌彦 2017 「吾妻川内出土の石錆・石刀・石刀片-鍔文式後期数量以降-」『研究紀要35』(公財) 郡理文
99. 石坂 茂 2017 「「桃家式」集落の構造-群馬県横堀型中村遺跡を中心とした分析-」『鍔文時代28』鍔文時代文化研究会
100. 谷藤泰彦・関根重二・鈴木佑太郎 2018 「群馬県内の柄鏡(霞石・住居成)」『研究紀要36』(公財) 郡理文
101. 銚木泰志 2018 「鍔文後期前ににおける鍔型式の立派化-閑谷信越地域の「型式化鍔型」-」『地域考古学3号』地域考古学研究会
102. 山口道弘 2018 「八ヶ場ダム地域の鍔文時代遺跡」『ぐんま地文化』第51号 (財) 群馬県地域文化振興会
103. 大木紳郎 2018 「群馬県北群馬郡吾妻川流域の後期注土器遺跡について」『研究紀要37』(公財) 郡理文
104. (財) 郡理文・国交省 2002 「長野原一本松遺跡」『長野原一本松遺跡』(2) 八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
105. (財) 郡理文・国交省 2002 「八ヶ場ダム発掘調査集成(1)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
106. (財) 郡理文・国交省 2003 「久々田遺跡・中郷II遺跡・下原遺跡・横堀中村遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
107. (財) 郡理文・国交省 2004 「久々田遺跡(2)・中郷I遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
108. (財) 郡理文・国交省 2005 「横堀中村遺跡(2)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
109. (財) 郡理文・国交省 2005 「原原御前山遺跡(2)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
110. (財) 郡理文・国交省 2006 「横堀中村遺跡(3)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
111. (財) 郡理文・国交省 2006 「立馬B遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
112. (財) 郡理文・国交省 2006 「上郷II遺跡・磐石A遺跡・二段池遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
113. (財) 郡理文・国交省 2006 「横堀中村遺跡(4)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
114. (財) 郡理文・国交省 2006 「立馬I遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
115. (財) 郡理文・国交省 2007 「下原御前山II」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
116. (財) 郡理文・国交省 2007 「三平I・II遺跡」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
117. (財) 郡理文・国交省 2007 「横堀中村遺跡(5)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
118. (財) 郡理文・国交省 2008 「長野原一本松遺跡(2)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
119. (財) 郡理文・国交省 2008 「幸浦遺跡・上原II遺跡・山根III遺跡(2)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
120. (財) 郡理文・国交省 2008 「榎木B遺跡(1)」八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

121. (財) 群理文・国交省 2008 「長野原一本松遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
122. (財) 群理文・国交省 2008 「横壁中村遺跡（6）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
123. (財) 群理文・国交省 2008 「横壁中村遺跡（7）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
124. (財) 群理文・国交省 2008 「上ノ平Ⅰ遺跡（1）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
125. (財) 群理文・国交省 2008 「長野原一本松遺跡（4）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
126. (財) 群理文・国交省 2009 「立馬山遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
127. (財) 群理文・国交省 2009 「榎木立遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
128. (財) 群理文・国交省 2009 「長野原一本松遺跡（5）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
129. (財) 群理文・国交省 2009 「横壁中村遺跡（8）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
130. (財) 群理文・国交省 2009 「横壁中村遺跡（9）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
131. (財) 群理文・国交省 2010 「横壁中村遺跡（10）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
132. (財) 群理文・国交省 2010 「横壁中村遺跡（11）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
133. (財) 群理文・国交省 2010 「東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集
134. (財) 群理文・国交省 2011 「東宮遺跡（1）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
135. (財) 群理文・国交省 2012 「横壁中村遺跡（12）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
136. (財) 群理文・国交省 2012 「東宮遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
137. (財) 群理文・国交省 2012 「榎木立遺跡／上原IV遺跡（2）／西久保IV遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集
138. (財) 群理文・国交省 2013 「長野原一本松遺跡（6）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第40集
139. (公財) 群理文・国交省 2013 「横壁中村遺跡（13）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
140. (公財) 群理文・国交省 2014 「長野原一本松遺跡（7）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第42集
141. (公財) 群理文・国交省 2014 「林坂Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡・長野原城」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
142. (公財) 群理文・国交省 2014 「横壁中村遺跡（14）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第44集
143. (公財) 群理文・国交省 2015 「尾原Ⅲ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
144. (公財) 群理文・国交省 2015 「上原I・II遺跡・上原III遺跡・林宮原遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第46集
145. (公財) 群理文・国交省 2015 「林坂Ⅳ・V遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第47集
146. (公財) 群理文・国交省 2016 「尾坂遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第48集
147. (公財) 群理文・国交省 2017 「上ノ平Ⅰ遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
148. (公財) 群理文・国交省 2017 「上原Ⅲ・IV遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第50集
149. (公財) 群理文・国交省 2017 「東原Ⅲ・IV遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
150. (公財) 群理文・国交省 2017 「下原Ⅲ・IV遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
151. (公財) 群理文・国交省 2018 「東宮遺跡（4）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第53集
152. (公財) 群理文・国交省 2018 「西原遺跡（1）・西宮宮殿」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第54集
153. (公財) 群理文・国交省 2018 「上ノ平Ⅰ・II遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第55集
154. (公財) 群理文・国交省 2018 「尾坂遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第56集
155. (公財) 群理文・国交省 2018 「川原中原原跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
156. (公財) 群理文・国交省 2018 「石臼原遺跡（1）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第58集
157. (公財) 群理文・国交省 2018 「下原遺跡（1）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第59集
158. (公財) 群理文・国交省 2018 「林坂Ⅵ・VII遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第60集
159. (公財) 群理文・国交省 2019 「下原Ⅲ・IV遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第61集
160. (公財) 群理文・国交省 2019 「中棚Ⅰ・II遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第62集
161. (公財) 群理文・国交省 2019 「林坂Ⅷ・IX遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第63集
162. (公財) 群理文・国交省 2019 「西ノ原Ⅰ・II遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第64集
163. (公財) 群理文・国交省 2019 「西久保I・II遺跡（2）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第65集
164. (公財) 群理文・国交省 2019 「川原勝沼遺跡（3）」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
165. (財) 群理文 1998 「長野原久々戸遺跡 駐道長野原草津川停車線道路（横橋）」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（財）群理文調査報告書 第240集
166. 群馬県・(公財) 群理文 2012 「尾坂遺跡・社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）長野原草津川駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(公財) 群理文調査報告書 第346集
167. 國學院大學文学部考古学研究室 2017 「群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡」2014年度発掘調査報告書 國學院大學文学部考古学実習報告 第53集
168. 國學院大學文学部考古学研究室 2015-2019 「現地説明会資料「居家以岩陰遺跡発掘調査（第2次～第6次調査）」
169. 佐山浩哉 2019 「群馬県居家以岩陰遺跡における鍛冶早期人の発掘調査」日本考古学会第85回総会 研究発表要旨
170. 近藤 修 2019 「羽柴以岩陰出土中の鍛冶早期人骨における同位体分析」日本考古学会第85回総会 研究発表要旨
171. 米田 権 2019 「居家以岩陰遺跡の鍛冶早期人骨における同位体分析」日本考古学会第85回総会 研究発表要旨
172. 植田信太郎・野水文男 2019 「ミトコンドリアDNAからみた居家以岩陰遺跡出土人骨の遺伝的系統」日本考古学会第85回総会 研究発表要旨
173. (財) 群理文 2005 「年報24」
174. (財) 群理文 2006 「年報25」
175. (財) 群理文 2007 「年報26」
176. (財) 群理文 2008 「年報27」
177. (財) 群理文 2009 「年報28」
178. (財) 群理文 2010 「年報29」
179. (公財) 群理文 2013 「年報32」
180. (公財) 群理文 2014 「年報33」
181. (公財) 群理文 2015 「年報34」
182. (公財) 群理文 2016 「年報35」

183. (公財)群理文 2017 「年報36」
184. (公財)群理文 2018 「年報37」
185. (公財)群理文 2019 「年報38」
186. (財)群理文 1995 「遺跡は今 第1号」
187. (財)群理文 1996 「遺跡は今 第2号」
188. (財)群理文 1996 「遺跡は今 第3号」
189. (財)群理文 1997 「遺跡は今 第4号」
190. (財)群理文 1997 「遺跡は今 第5号」
191. (財)群理文 1998 「遺跡は今 第6号」
192. (財)群理文 1999 「遺跡は今 第7号」
193. (財)群理文 2000 「遺跡は今 第8号」
194. (財)群理文 2000 「遺跡は今 第9号」
195. (財)群理文 2000 「遺跡は今 第10号」
196. (財)群理文 2002 「遺跡は今 第11号」
197. (財)群理文 2003 「遺跡は今 第12号」
198. (財)群理文 2004 「遺跡は今 第13号」
199. (財)群理文 2006 「遺跡は今 第14号」
200. (財)群理文 2007 「遺跡は今 第15号」
201. (財)群理文 2008 「遺跡は今 第16号」
202. (財)群理文 2009 「遺跡は今 第17号」
203. (財)群理文 2010 「遺跡は今 第18号」
204. (財)群理文 2011 「遺跡は今 第19号」
205. (財)群理文 2012 「遺跡は今 第20号」
206. (公財)群理文 2013 「遺跡は今 第21号」
207. (公財)群理文 2014 「遺跡は今 第22号」
208. (公財)群理文 2015 「遺跡は今 第23号」
209. (公財)群理文 2016 「遺跡は今 第24号」
210. (公財)群理文 2017 「遺跡は今 第25号」
211. (公財)群理文 2018 「遺跡は今 第26号」
212. (公財)群理文 2019 「遺跡は今 第27号」
213. 篠原正洋 2003 「『明記流』にまつた屋根の謎—長野原町東宮遺跡—」『理文群馬47』(公財)群理文
214. 斎藤周一 2012 「東宮遺跡—八ヶ場で発掘された江戸時代—」『理文群馬56』(公財)群理文
215. 岩崎泰一・中沢悟 2015 「東宮遺跡・西宮遺跡—現した江戸時代の川原畠村—」『理文群馬59』(公財)群理文
216. 斎藤和明・麻生敏隆 2015 「石川原遺跡—見えてきた上湖原の歴史—」『理文群馬60』(公財)群理文
217. 中澤悟 2016 「『西原遺跡—天明記流』から発見された江戸時代の川原畠村—」『理文群馬61』(公財)群理文
218. 関 俊明・小林義夫 2016 「久々戸遺跡—天明記流の埋蔵下に残っていた縄文時代の散石住居跡—」『理文群馬61』(公財)群理文
219. 山口弘 2014 「中野原II遺跡—縄文時代中期～後期の環状集落—」『理文群馬62』(公財)群理文
220. 松坂 恵・根岸正佳 2017 「東宮遺跡—姿を現した江戸時代以前の東宮集落—」『理文群馬62』(公財)群理文
221. 富下 親・石田 真・間 明愛・斎藤周一 2018 「西宮遺跡—江戸時代の建物跡 建築部材の発見と機織り具—」『理文群馬63』(公財)群理文
222. (公財)群理文 2015 平成27年度調査遺跡発表会「東宮遺跡・西宮遺跡の調査」
223. (公財)群理文 2016 平成28年度調査遺跡発表会「長野原町石川原遺跡の調査」
224. (公財)群理文・長野原町教育委員会 2016 平成30年度調査遺跡発表会「発掘された八ヶ場の軌跡」
225. (公財)群理文 2012 平成24年度最新情報発表第1期「東宮遺跡へ八ヶ場で発掘された江戸時代」
226. (公財)群理文 2016 平成28年度最新情報発表第1期「古事記の縄文文化 古代人の心」
227. (公財)群理文 2017 平成29年度最新情報発表第1期「よみがえった江戸時代の村一天明三年浅間記流下の発掘調査から」
228. (公財)群理文 2018 平成29年度最新情報発表第3期「一万年につく粉食文化—縄文クッキーからおつきこみまで—」
229. (公財)群理文 2019 平成30年度最新情報発表第3期「古代の装身具」
230. (公財)群理文 2019 令和元年度最新情報発表第1期「八ヶ場の縄文時代」
231. (公財)群理文 2019 令和元年度最新情報発表第2期「江戸時代の天明記流に被災した村」
232. 松島宏治 2010 理蔵文化財講座「天明三年の地域社会—縄歌の発動から八ヶ場ダムまで—」
233. 黒澤照弘 2014 理蔵文化財講座「江戸の現闇山噴火—その時、東宮遺跡の人々はどうしたか—」
234. 山口逸弘 2016 理蔵文化財講座「久々戸遺跡被出の散石住居」
235. 藤森徹也 2016 理蔵文化財講座「発掘された群馬の城」
236. 関 俊明 2016 理蔵文化財講座「江戸民家—天明三年の復元焼け前後の風景—」

第5图 山根川漫滩IV调查区全体图 ( $S = 1/180$ )



## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

本調査で検出された遺構は土坑7基のみである。うち4基は平安時代の陥し穴、2基は縄文時代の土坑、1基は縄文時代の土坑を平安時代に陥し穴として2次利用した可能性があると判断した。町営横壁地区土地改良事業で隣接した東側の調査区では陥し穴を中心とした土坑群が検出されており、所属時期が判明しているのは縄文時代早期の土坑のみである。本調査区でも時期を特定できる遺物の出土は皆無に等しい。

### 第2節 縄文時代・平安時代の遺構と遺物

#### (1) 土 坑（陥し穴）

SK01 (第6・12図／PL3・5)

位 置 調査区南側中央。

検出状況 抜根痕を精査中に検出された。

重複関係 なし。

遺存状態 北東側の上場・中場の約2分の1を抜根により欠損。

覆 土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。7層は人為的な貼壁である。

平面形と規模 平面形は上面・下面とも楕円形を呈すると考えられ、規模は現状で長軸218cm(復元260cm)、短軸182cm、確認面からの深さは最深132cmを測る。

長軸方位 N-108°-W

壁 面 底面付近は貼壁が頗著でハンゲし、壁は薬研状に外傾しながら立ち上がっている。

底 面 南西から北東へ傾斜している。

遺 物 総出土量は縄文土器片1点のみである。縄文土器の深鉢体部片で、外面に半截竹管による斜位平行沈線文、その下はLR縄文を施している(第12図1)。縄文時代前期後半の諸磯a式と考えられるが、流れ込みである。

備 考 平安時代の陥し穴である。

SK02 (第7図／PL3)

位 置 調査区中央東壁沿い。SK03の南側。

検出状況 抜根痕を精査中に検出された。

重複関係 なし。

遺存状態 調査区外に延びており、一部の検出に留まる。

平面形と規模 平面形は円形ないし楕円形を呈すると考えられる。規模は検出範囲で長軸78cm、短軸22cm、確認面からの深さ77cmを測る。

長軸方位 N-162°-WないしN-72°-W

覆 土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

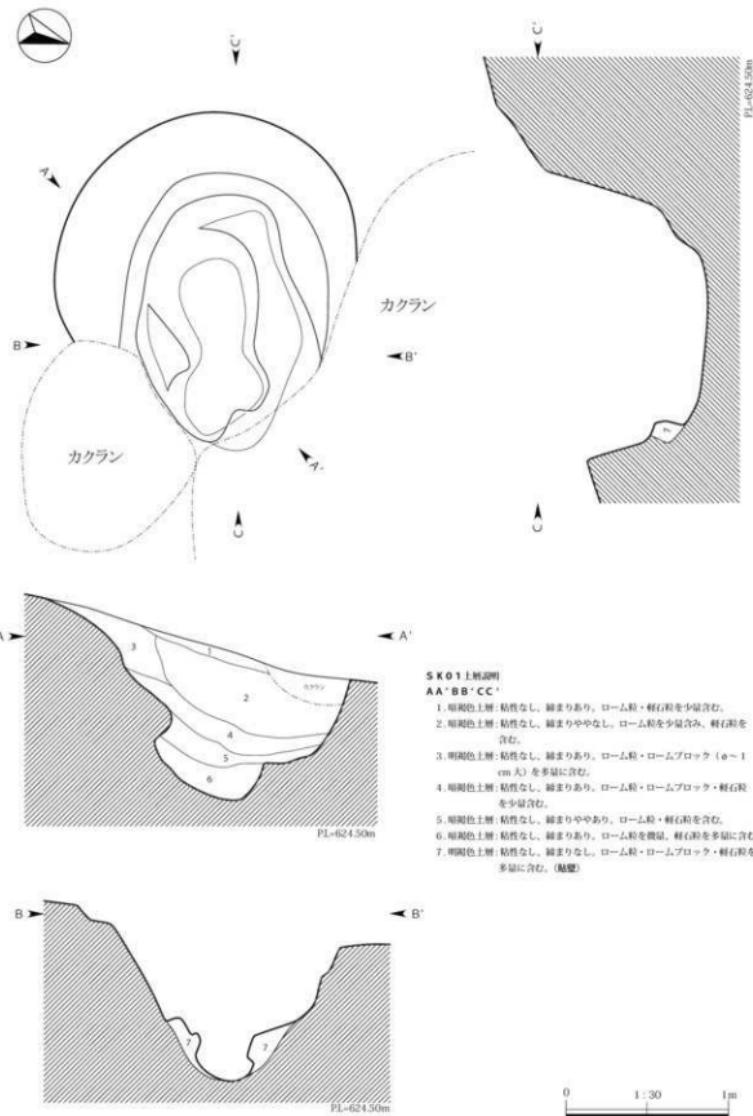
壁 面 若干の段を有し、薬研状に外傾しながら立ち上がっている。

底 面 ほぼ平坦である。

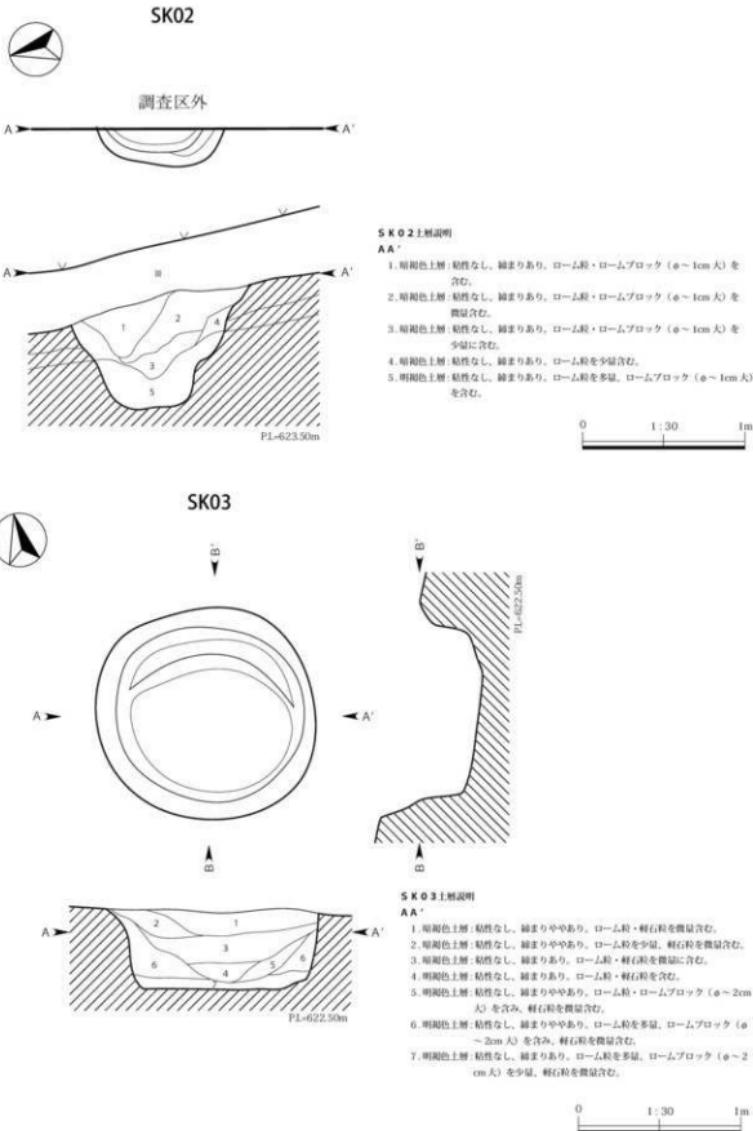
遺 物 なし。

備 考 部分検出であるが、平安時代の陥し穴であろう。

### SK01



第6図 SK01実測図 ( $S=1/30$ )



第7図 SK02・03実測図 ( $S=1/30$ )

### SK03 (第7・12図／PL3・5)

位 置 調査区中央東壁沿い。SK02の北側。

検出状況 抜根痕を精査中に検出された。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

平面形と規模 平面形は円形を呈し、規模は長軸136cm、短軸130cm、確認面からの深さ63cmを測る。

長軸方位 N-79°-W

覆 土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

壁 面 外傾しながら立ち上がっている。

底 面 ほぼ平坦であるが南西から北東へ傾斜している。

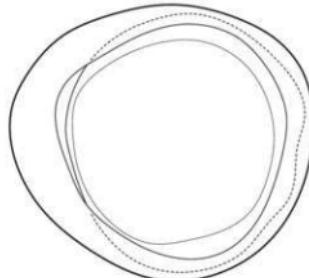
遺 物 総出土量は縄文土器片1点である。縄文土器深鉢の体部片で、外面は不鮮明である（第12図2）。

備 考 平断面や堆積土層から判断して縄文時代の土坑と考えられる。

### SK04

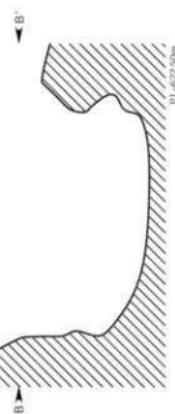


A



E

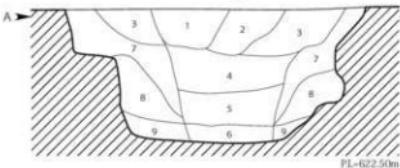
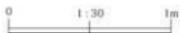
A'



#### SK04 土層説明

AA'

1. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉を微量、軽石粒（φ～0.5cm大）を含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。軽石粒（φ～1cm大）を多量に含む。
3. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉を少量、軽石粒（φ～1cm大）を含む。
4. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉を微量、軽石粒（φ～2cm大）を多量に含む。
5. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉・軽石粒（φ～2cm大）を含む。
6. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉・軽石粒（φ～3cm大）を含む。
7. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉・ロームブロック（φ～1cm大）を含む。
8. 明褐色土層：粘性なし、緑まりややあり。ローム粉を多量、ロームブロック（φ～1cm大）を含む。
9. 明褐色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粉・ロームブロック（φ～1cm大）を少量含む。



第8図 SK04実測図 (S=1/30)

#### SK04 (第8図／PL4)

位置 調査区中央東側。SK02・03の西側。

検出状況 抜根痕を精査中に検出された。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

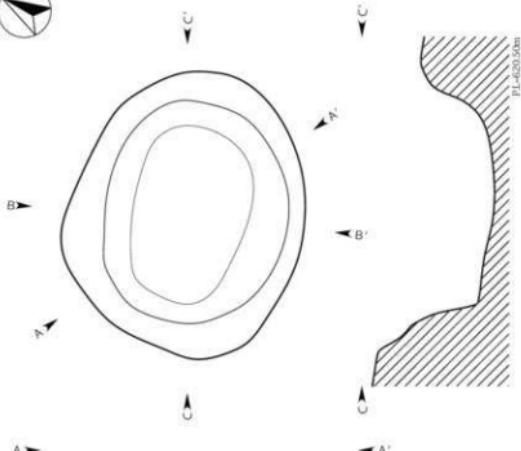
平面形と規模 平面形は梢円形を呈し、規模は長軸 176cm、短軸 170cm、確認面からの深さ 82～100cmを測る。

長軸方位 N-74°-W

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

壁面 底面付近は貼壁・ハングが認められ、段を有してやや外傾しながら立ち上がっている。

#### SK05



A

A'

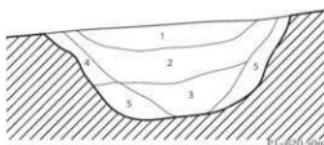
C

C'

B

B'

D

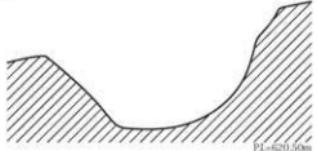


#### SK05上層説明

A-A'

1. 喀褐色土層：粘性なし、縫まりあり、ローム粒を微量、軽石粒を少量含む。
2. 喀褐色土層：粘性なし、縫まりあり、ローム粒・軽石粒を含む。
3. 喀褐色土層：粘性なし、縫まりややあり、ローム粒を多量、軽石粒を微量含む。
4. 喀褐色土層：粘性なし、縫まりあり、ローム粒を少量、軽石粒を含む。
5. 明褐色土層：粘性なし、縫まりあり、ローム粒・軽石粒を多量、ロームブロック（φ～2cm大）を含む。

E



0 1:30 1m

第9図 SK05実測図 (S=1/30)

**底 面** ほぼ平坦である。

**遺 物** 総出土量は縄文土器器片 1 点であるが図示するには至らなかった。

**備 考** 調査時は縄文時代のフ拉斯コ状土坑と考えていたが、堆積土層から判断して、平安時代の陥し穴として 2 次利用した可能性が高い。

#### SK05 (第9図／PL4)

**位 置** 調査区北東側。

**検出状況** 抜根痕を精査中に検出された。

**重複関係** なし。

**遺存状態** 良好。

**平面形と規模** 平面形は梢円形を呈し、規模は長軸 172cm、短軸 146cm、確認面からの深さ 70cm を測る。

**長軸方位** N - 100° - W (上面)・N - 106° - W (下面)

**覆 土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

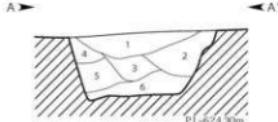
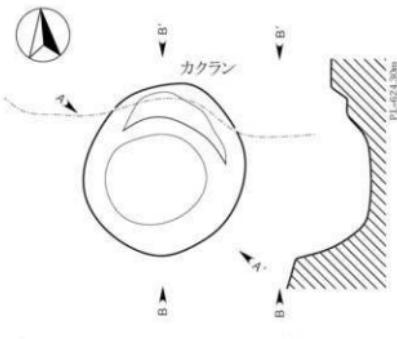
**壁 面** 外傾して立ち上がっている。

**底 面** ほぼ平坦であるが、南側から北側へ若干傾斜している。

**遺 物** なし。

**備 考** 掘り込み面がもっと上にあると考えれば、平安時代の陥し穴と考えられる。

#### SK06



#### SK06 土層説明

AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし。縫まりあり。ローム粒・軽石粒を少部分含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。縫まりあり。ローム粒・軽石粒（φ ~ 1cm 大）を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。縫まりあり。ローム粒を微量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。縫まりややあり。ローム粒・ロームブロックを微量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。縫まりあり。ローム粒・ロームブロック（φ ~ 1cm 大）を少部分含む。
6. 明褐色土層：粘性なし。縫まりあり。ローム粒・ロームブロック（φ ~ 1cm 大）を含む。

0 1:30 1m

第10図 SK06実測図 (S=1/30)

**SK06 (第10・12図／PL4・5)**

位 置 調査区中央。SK07の南東側。

検出状況 抜根痕を精査中に検出された。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

平面形と規模 平面形は円形を呈し、規模は長軸108cm、短軸97cm、確認面からの深さ47cmを測る。

長軸方位 N-153°-W

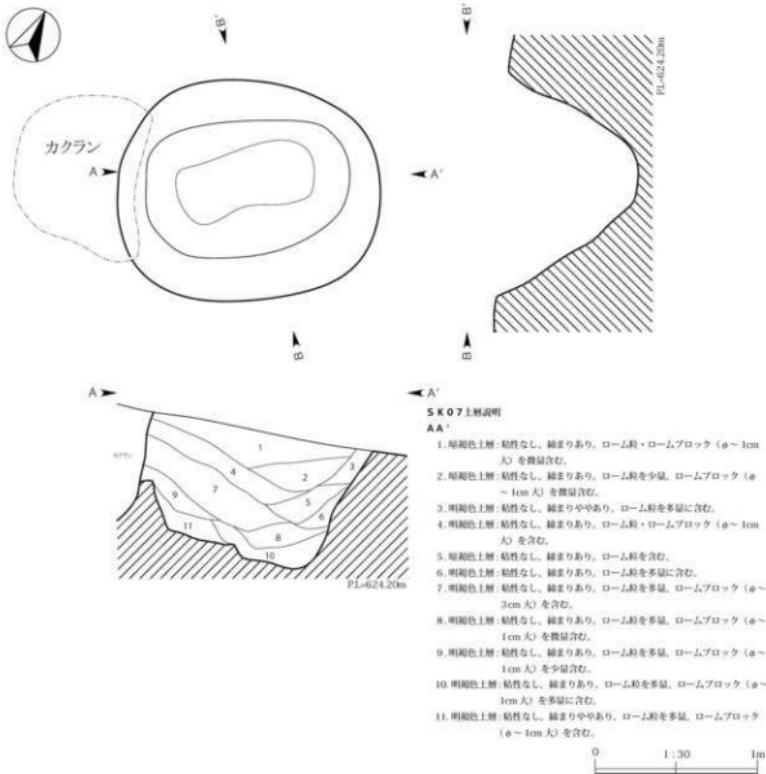
覆 土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

壁 面 外傾しながら立ち上がっている。

底 面 ほぼ平坦である。

遺 物 総出土量は縄文土器片1点、石器1点、炭化材1点の合計3点である。そのうち石器1点を図示した(第12図3)。

SK07



第11図 SK07実測図 (S=1/30)

**備 考** 平断面や堆積土層から判断して縄文時代の土坑と考えられる。

**SK07 (第11図/PL4)**

**位 置** 調査区中央西側。SK06の北西側。

**検出状況** 抜根痕を精査中に検出された。

**重複関係** なし。

**遺存状態** 西壁上面を搅乱により失っているが全体的に良好。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈し、規模は長軸162cm、短軸136cm。確認面からの深さ88cmを測る。

**長軸方位** N-116°-W(上面)・N-133°-W(下面)

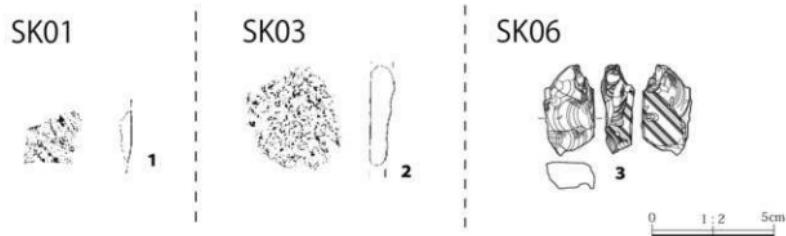
**覆 土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**壁 面** 外傾しながら立ち上がっている。

**底 面** 凹状を呈し、南西から北東へ段を有して傾斜している。

**遺 物** 総出土量は炭化材1点のみである。

**備 考** 平断面や堆積土層から判断して平安時代の土坑と考えられる。



第12図 土坑出土遺物実測図 (S=1/2)

第3表 山根III遺跡IV出土遺物観察表

標印No.	回収No.	香種	法量(高さ/口径/底径) (cm)	特徴(形態・手法等)	構成	胎土・材料等	色調(外表面/内面)	備考
12-1	5	縄文土器 深鉢	(2.1)/-/一	外面は半截竹管による斜位沈練・LR模写。 内面は全面網練。	良好	角閃石	に赤い黄	破片資料(体部) SK01
12-2	5	縄文土器 深鉢	(4.1)/-/一	外面は不鮮明。内面は綱目ミガキ。	やや不良	長石	黄	破片資料(体部) SK03
12-3	5	薄片石器 ・石核	長3.7/幅2.0/厚1.4 重積 10.4 g.	-	黑曜石	-	完存	SK06

# 写 真 図 版





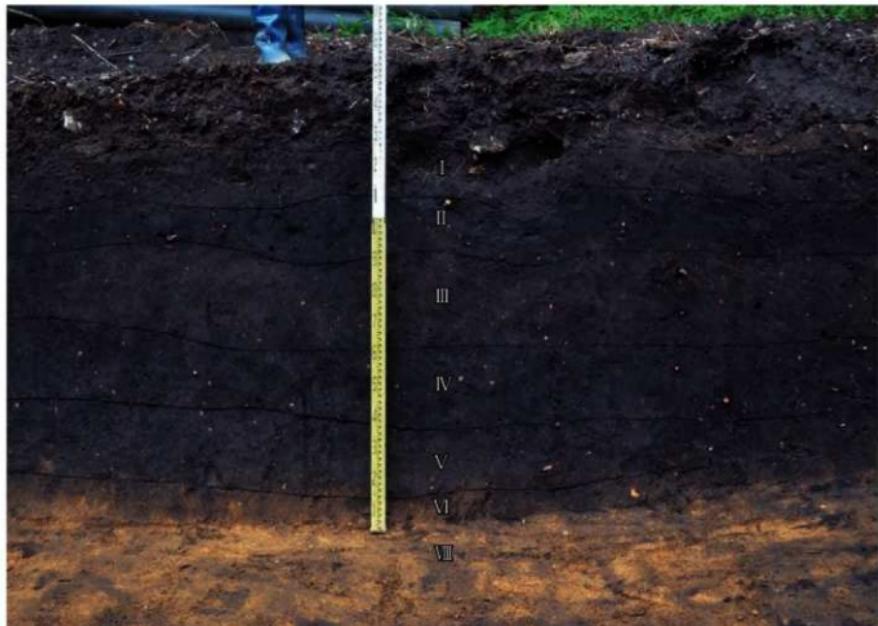
1. 調査区遠景①（北から）



2. 調査区遠景②（北真上から）



1. 調査区近景（北東から）



2. 基本土層（調査区南壁）



1. SK01 ① (東から)



2. SK01 ② (北から)



3. SK01 半截 (南東から)



4. SK01 掘り方① (東から)



5. SK01 掘り方② (北から)



6. SK02 (西から)



7. SK03 (北から)



8. SK03 半截 (北から)



1. SK04 (北から)



2. SK04 半截 (北から)



3. SK05 (北から)



4. SK05 半截 (北から)



5. SK06 (北から)



6. SK06 半截 (北東から)



7. SK07 (北西から)



8. SK07 半截 (北西から)

SK01



SK03



SK06



# 報告書抄録

ふりがな	やまねさんいせきよん							
書名	山根Ⅲ遺跡IV							
副書名	水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	第5集							
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1392 群馬県吾妻郡長野原町大字長野原 1340-1 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦 2020年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山根Ⅲ遺跡IV	群馬県吾妻郡長野原町 大字横壁	10424	29	365390	1386644	20190621 ～ 20190711	700	横壁地区農業經營 近代化施設整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
山根Ⅲ遺跡IV	集落跡	縄文時代 平安時代		土坑 陥し穴	2基 5基	土師器・縄文土器・ 石器・炭化材	平安時代の陥し穴群 の検出	
要約	本遺跡は町域北部の吾妻川流域帯に所在し、吾妻川の右岸段丘上に立地する。調査地点の標高は 620 ~ 626m 位である。縄文時代の土坑 2 基、平安時代の陥し穴 5 基が検出された。そのうち 1 基は縄文時代の土坑を平安時代に陥し穴として再利用した可能性があることが考えられた。出土遺物に関しては、時期を特定できる遺物が皆無に等しく、平安時代の陥し穴である SKO1 に流れ込んだ縄文土器が前期後半諸磧 a 式に比定されるのみであった。							

## 山根Ⅲ遺跡IV

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

令和2年3月23日 印刷

令和2年3月30日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1392 群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1  
TEL 0279(82)4517 FAX 0279(82)3115

印刷 朝日印刷工業株式会社